

女子青年からみた親子間の呼称と心理的離乳

大野木 裕 明*

*仁愛大学人間生活学部

Psychological Weaning from the Perspective of a Child's Relation towards Parents

Hiroaki OHNOGI*

*Faculty of Human Life, Jin-ai University

親子間の心理的離乳に関して2つの研究を行った。研究1では親子間の心理的離乳と心理的距離の定義・測定方法を文献的に検討し次の結果を得た。1) 心理的離乳と心理的距離は非常に似た概念として扱われ概念上の区別を明確にした研究は見出されなかった。2) 心理的離乳の過程のうち自立や尊敬・軽蔑といった心理面を心理的距離の語によって表現する研究がいくつか見出された。研究2では女子青年301名に対して質問紙調査を実施し次のような結果を得た。3) 親子間の呼称変化の時期は中学生かあるいは変化しないという2極化傾向にあった。4) 呼称変化に関する自由記述から反抗期、お互いの照れ、対等の大人、他者の目・暗黙の圧力・世間体、気分・対人的スキル、間合い・距離感の6つの呼称変化の理由が得られた。5) 心理的離乳に関する自由記述には、好意、嫌悪、親密、疎遠、尊敬、軽蔑、既知、未知、関心、無関心、依存、独立、信頼、不信などの語が多く書かれていた。これにより、西平(1990)、落合(1995)らの心理学的離乳の仮説が、本調査の回答者の素朴な記述と概ね矛盾しないことが確認された。6) 時間的距離(時間間隔)、空間的距離、心理的距離の3側面について親子の距離感を5件法で尋ねたところ、3つの距離間には有意な正の相関が得られた。また、3つの距離得点ともに、父親よりも母親に対する距離の方が有意に近かった。

キーワード：親子関係 心理的離乳 心理的距離 呼称 間合い

青年期の子どもたちが年齢とともに親から独立していく過程は、しばしば心理的離乳や心理的距離などの用語を使って記述・説明される。それは親子間の呼称の変化から検討される(矢野, 1973; 大野木, 2005)。しかしながら、心理的離乳、心理的距離、呼称などが親子関係の発達に関して相互にどんな関連性を持っているかについては、われわれが経験的に実感するほどには定かではない。

本稿は2つの研究から構成されている。研究1は文献的研究であり、混在している心理的離乳と心理的距離の用語を整理する。研究2は実証的研究であり、呼称の変化の時期と心理的離乳の道筋について3つの距離感からなる「間合い」という視点からの検討を行う。

また、呼称の変化と心理的離乳との対応関係について糸口を探っていく。

研究1：文献的研究

1. 心理学辞典から

まず最初に、代表的な心理学辞典の中に、心理的離乳、心理的距離がどのように説明されているかを検討する。

1-1 『新版心理学事典』(平凡社, 1981年)

心理的離乳、心理的距離の項目見出しは、いずれも記載されていない。

1-2 『心理学辞典』(有斐閣, 1999年)

心理的離乳はあるが、心理的距離は項目見出しにはない。

心理的離乳：青年期前期頃に生じる、親からの心理的自立の試み、あるいは情緒的自律性(emotional autonomy)の獲得をさしている。それは、しばしば、親への反抗、親との葛藤を伴い、一時的にその関係性および青年の生活全般を不安定なものにするが、それを通して青年は親との間に最適な心理的距離を見出し、親とは異なる独自の価値観、信念、理想などを確立するに至る。こうした心理的離乳、自律性の獲得は、多くの場合、同じ苦悩を共有する友人との相互依存関係を通して(不安に対処し)、漸次的に具現されるものといわれる。(p.461, 遠藤利彦)

1-3 『心理学辞典』(丸善, 2004年)

心理的離乳、心理的距離の見出しはいずれも記載されていない。

以上、2つの代表的な心理学辞典には、心理的離乳、心理的距離の項目見出しはない。『心理学辞典』(有斐閣)には心理的離乳の説明があるが心理的距離の説明はなく、心理的距離の語を使って心理的離乳の説明をしている。

2. 心理的離乳に関する定義と測定

特に日本を中心にして、心理的離乳を扱った代表的な研究を見ていく。

2-1 Hollingworth (1928)

ホリングワース(Hollingworth, 1928)は、12歳~20歳の青年には家族の監督から離れて一人の独立した人間になろうとする衝動が現れるとして、このような青年の自立を心理的離乳(psychological weaning)の用語を使って説明しようとした。これは、青年期の心理的な独立・自立を、幼児期の子どもの離乳になぞらえたものである。

現在、発達心理学の概説書、青年心理学の専門書などでは、この心理的離乳の語はよく使われている。しかしながら、次の西平(1990)があらわれるまでは、心理的離乳の概念の検討に大きな影響を及ぼす研究は見出されなかった。

2-2 西平(1990)の心理的離乳3段階説

西平(1990)は心理的離乳を第一次から第三次までの3つの段階に分けた。この段階説はかなり難解で複雑であるが、あえて概略をまとめると次のようになるだろう。

- ①第一次心理的離乳(思春期~青年期中期)：子どもが親との依存関係を脱却して、親子の絆を壊そうとすることが中心課題となる時期。
- ②第二次心理的離乳(青年期中期~青年期後期)：第一次心理的離乳で得られた自律性によって、子どもが親を客観的にながめ、お互いの関係を自覚的に修復し、親子の絆の再生と強化を行うことが課題となる時期。
- ③第三次心理的離乳(青年期後期以降)：両親から学んだ価値観を超越し、自らの生き方を確立しようとする真の自己実現を目指す段階。

2-3. 落合(1995)の5段階仮説

落合(1995)によると、親子関係は、親から見た親子間の距離の大きさによって、次の5段階の親子関係に分けることができる(p.51)。

- ①第1段階：親が子どもを手の届く範囲において、子どもを抱え込み養っていく親子関係(子どもを抱え込む親)。
- ②第2段階：親が子どもを目の届く範囲において、親が子を危険から守ろうとする親子関係(子どもを守る親)。
- ③第3段階：目の届かない所に行ってしまう子どもの成長を、親が遠くで念じている親子関係(子どもの成長を遠くであって念じる親)。
- ④第4段階：親子が手を切り、親子間の距離を大きく取る親子関係(子どもと手を切る親)。
- ⑤第5段階：子は子でありながら親になり、親は親でありながら子になる親子関係(対等な親子関係、心理的に離乳した関係)。

ここで西平(1990)、落合(1995)の心理的離乳の考え方をあえて対比すると、西平(1990)では子どもが親からどのように自立していくか、逆に落合(1995)では親がどのように子どもを自立させていくかという密着から分離の過程に関する記述が強調されている。ただし、親子関係であるから、おそらくは、片方の視点に固執するということの意味しているわけではない。

また西平（1990）では青年の内面に焦点をあてる傾向があるのに対して、落合（1995）では親子の距離の大きさが記述されている。この距離には2つの意味があり、1つは空間的距離（おそらくは対人距離やパーソナルスペース）、もう1つは心理的距離であると見受けられる。

2-4 落合・斉藤（1996）の実証的研究

落合・斉藤（1996）は、「親の子に対する関わり方を、子どもがどのように認知しているか」に関して、質問紙調査法を用いた実証的な検討を行っている。彼らは、第Ⅰ段階（親が子を抱え込む親子関係／親が子と手を切る親子関係）、第Ⅱ段階（親が子を危険から守る親子関係）、第Ⅲ段階（子が困った時には親が支援する親子関係）、第Ⅳ段階（子が親から信頼・承認されている親子関係）、第Ⅴ段階（親が子を頼りにする親子関係）の5段階と、青年期の年齢の間の対応関係を見出そうとした。中学生から大学院生までの調査協力者に対して質問紙調査を実施したところ、結果として、中学生が多く対応する年齢段階はⅠ、Ⅱ、Ⅲの段階であり、大学生・大学院生が多く対応する年齢段階はⅣとⅤの段階であったという。

この調査は本格的な実証的研究であり、ここでは心理的離乳の過程の説明に心理的距離の語が使われている。

2-5 池田・大竹・落合（2006）の実証的研究

落合（1995）の5段階仮説、落合・斉藤（1996）の実証的研究は、親の子に対するかかわり方を子どもがどのように認知しているかの研究である。これに対して、池田・大竹・落合（2006）では、子の親に対するかかわり方を子どもがどのように認知しているかについて、自由記述を求めている。この研究もまた、心理的離乳と心理的距離を明確に区別しておらず、むしろ親子の心理的離乳の過程を心理的距離の大きさによって説明しようとしている。

3. 心理的距離に関する定義と測定

3-1 心理的距離の定義

『青年心理学事典』においては、心理的距離（psychological distance）は次のように説明されている。「ある他者との間でどれほど親密で理解し合った関係

にあると感じているかの度合いである（金子俊子）」（p. 272）。また、金子（1991）は、心理的距離に関連すると思われる用語を整理した上で、次のように定義している。「自己が、ある他者との間で、どれほど強く心理的な面でのつながりを持っていると感じ、どれほど強く親密で理解し合った関係を持っていると感じているかの度合い」。

3-2 金子（1991）の実証的研究

心理学関係の学会誌を中心にして、心理的距離がどのように測定されているかを検討する。

金子（1991）は青年期女子の親子・友人関係における心理的距離を測定するために、信頼感や理解、心のつながりを測定する心理的距離尺度を開発している。心理的距離尺度（10項目）は次の通りであり、■には、親友、父親、母親をあてはめる。（*）は逆転項目である。この尺度では、心理的距離は親子にも友人にも使えるようになっている。

表1 金子（1991）による心理的距離尺度

- | | |
|----|---------------------------|
| 1 | 私は■のことを非常に信頼している。（*） |
| 2 | ■は私の気持ちをよくわかってきていると思う。（*） |
| 3 | 私は■と本当に理解し合っていないように思う。 |
| 4 | 私は■と気が合う。（*） |
| 5 | 私は■と一緒にいると心が安らぐ。（*） |
| 6 | 私は■とうまくいっていると思う。（*） |
| 7 | ■と私は心のつながりがうすいように感じる。 |
| 8 | ■に対して反発したくなる。 |
| 9 | 私と■のつながりはうわべだけのものであると思う。 |
| 10 | 私と■はあいられないところがある。 |

3-3 質問項目あるいは評定尺度等による諸研究

親子間の心理的離乳という本稿の目的からは外れるが、他の研究目的の中で使われた心理的距離に関する文献をみていく。

上野・上瀬・松井・福富（1994）は青年期の交友関係における同調と心理的距離を探るために、交友関係についての友人との心理的距離を、次の質問項目3項目への回答によって求めている。「項目1 相手の考えていることに口をはさまない。」「項目2 お互いに、相手に甘えすぎない。」「項目3 お互いの領分にふみこまない。」。

藤井 (2001) は、青年期の相手との心理的距離の程度を「非常に近い」から「非常に遠い」までの7段階を使って回答を求めている。

佐々木・菅原・丹野 (2005) は、他者との親しさを心理的距離という言葉に置き換えて表現している。相手との心理的距離を3群設けている。心理的距離の近群：もっとも気心の知れた同性の友人、心理的距離の中群：話をしたことはないが、顔や名前を知っている同性の知人、心理的距離の遠群：見知らぬ人。

山口・小島・原野 (1991) は、生徒個人と父親との心理的距離を1と規定した時、生徒個人と他者との親密から疎遠までの心理的距離がいくつになると思うかを10段階で評定させている。心理的距離は親密感と同じものとして扱われている (p. 11)。

3-4 心理的距離地図や投影法的方法による実証的研究

Wapner (1978) と古川・藤原・井上・石井・福田 (1983) は、心理的距離地図 (psychological distance map; PDM) と呼ばれる方法を使っている。白紙の中央に自己を表す×印があり、白紙を自己の対人的環境、×印を自己と想定し、自己を取り巻く人々を○印で白紙の上に書き込んで表す。そして、この物理的距離の逆数を心理的距離とするものである。心理的距離 = 1 / 測定値で求める。

天貝 (1996) は、紙に9.5センチの線分を示して、回答者を端の位置 (自分の位置) として、最も親しい友人、普通の友人、最も親しい教師、普通の教師、家族のそれぞれについて、そこからの距離をマークさせている。教示は次のようである。「あなたの気持ちからどのくらいの距離にいますか。○を付けてください」。

山根 (1987) の研究は、自己と相手との間の心理的距離には次の4種類があるとしている。①能動表出：自己側の行動によって示される表出的距離、または、自己の行動が表現する心理的距離、②能動表象：本心としての表象的距離、または、自己の実感的心理的距離、③受動表出：認知された相手側の表出的距離、または、相手の行動が表現する心理的距離、④受動表象：推定された相手側の表象的距離、または、相手が実感していると思われる心理的距離。

さらに、他者はその面識度水準によって次の4水準に分けられるとした。①真他人：会話体験がなく、親密感もない互いに匿名の関係にある赤の他人、②知他人：匿名の相互性が破れ、自己側が一方的に見知っているが、会話体験がないため、知人としての相互性に達していない、③周辺知人：知人としての相互性に達しているが、会話頻度、親密感に乏しく、それ故、儀礼的関心の圧力を感じてしまう他者、④真知人：家族や親友など相互に親密な関係で結ばれている他者 (p. 330)。この研究は自分と他者との間の対人認知のズレについて着目した研究であり、親密性と会話体験の多少などから心理的距離をとらえている。

3-5 対人距離

心理的距離と似た概念として対人距離がある。ホール (Hall, 1966) は、米国の中産階級出身の白人を対象にした行動観察とインタビューによって、相互作用場面に見られる対人距離 (interpersonal distance) を4つに分類した。それらは、親密距離、個体距離、社会距離、公共距離である。この対人距離は心理的距離とよく似ているが、他者へのコミュニケーション場面を重視しているという点に特徴がある。実際、社会距離や公共距離に関しては多数の人たちに対してコミュニケーションを取る時の物理的 (空間的) 距離の問題に収れんしているからである。このような研究は、対人関係における空間的な距離 (すなわち対人距離) が心理的距離の何らかの反映であることを示唆している。

3-6 まとめ

以上をまとめると次のようになる。

①心理的離乳と心理的距離は非常に似た概念として扱われていて、概念上の区別を明確に示す論考は見出されない。

②心理的距離には、自分が周囲の友人・教師・家族などの相手に対してどれくらい遠いか近いかという距離そのものに関心が集中する傾向がある。その距離の中身である好き嫌いや尊敬・軽蔑といった心理面への言及が乏しい。

③心理的離乳は親子関係の発達に限定されていて、密着・依存から分離・独立へという一方向性の過程そのものに関心が集中している。

③心理的離乳も心理的距離もいずれも、ある程度長時間にわたる固定的な距離というニュアンスがある。場面や条件によって頻繁に接近・分離するという短時間の変化(状態 state)に関するとはえ方はされていない。この点で大野木(2005)の対人的な「間合い」概念(後述)とは異なる。

研究2：実証的研究

本研究の目的は、親子関係における心理的離乳に関して、その時期と状態を調査の方法によって把握することである。

第1の目的は呼称を手掛かりとして、現在の呼称、過去の変化の時期、呼称の変化の理由を明らかにし、さらに心理的離乳や心理的距離の発達に関する子ども側からの意識を調査的に検討することである。他の領域においては、ソシオメトリック・テストで測定した小中学生の集団内の人間関係を相互の呼称を手掛かりにして明らかにしようとした研究(中條・滝浪, 1989)、小学生のインフォーマル集団内外での相互の呼称には違いがあること(三島, 2003)などの研究がある。学校教師に対するニックネームやあだ名がどのような根拠で付けられたのかについての研究もある(大野木, 2000; 2001)。古い研究ではあるが、矢野(1973)もまた、家族の発達とともに家族構成員が変化する時、相互の呼称がどう変わっていくかを実態把握している。このような周辺的研究からは、呼称が心理的離乳に深く関連する可能性が十分に考えられるだろう。

第2の目的は、親に対しての時間的距離(時間間隔)、空間的距離、心理的距離がどのような状態であるかを調べることである。大野木(2005)は、看護学校入学生の相互の呼称について短い縦断的な追跡調査を行い、最初は「姓+さん(例えば、青木さん)」で始まる呼称がやがては「名前+ちゃん(例えば、由紀ちゃん)」やニックネームに変わっていくことを報告している。このようなことから、一緒に時間を過ごすこと、空間的に一緒に居ることが、心理的な親疎に深く関連することが予想できよう。大野木(2005)はこれを間合いという語で説明し、時間的間合い(同じ時間を過ごすこと、タイミングが合うことなど)、距離的・空間的

間合い(同じ場所・空間に居ること、対人距離が近いことなど)、心理的間合い(親密・疎遠、尊敬・軽蔑などの心理)の3つが相互に関連するという仮説を提案している。本調査では、研究1で明らかのように心理的離乳を親子の心理的距離とみなす。そして、間合い仮説に従い、両親への心理的距離が、親子で時間・空間を一緒に過ごす程度と関連するかどうかを調査的に検討していく。

1. 方法

1-1 調査時期と対象

A県にある私立女子短期大学の後期授業科目2クラス(2006年後期と2007年後期)の受講学生に対して実施。分析対象は授業時間中に調査用紙を配布し回答を求めたうちの自宅通学生301名である。

1-2 倫理的配慮

親子間の呼称について調査協力を求めることを前週に予告し協力を求め、家族に関する記述は名前に関する個人情報が含まれるので差し支えない範囲での回答協力をお願いすることを告げた。回答時間は約30分であった。

1-3 調査項目

目的1に関する6つの質問項目：

質問1：相互の呼称「自分と親との間でのお互いの呼び方は、普通、次のどれですか。」(10肢選択、選択肢は結果の箇所の後述)、質問2：呼び方の変化の時期「自分から父母への呼称が変化した時期はいつですか」(4肢選択、選択肢は結果の箇所の後述)、質問3：呼ばれ方の変化の時期「父母から自分への呼称が変化した時期はいつですか」(4肢選択、選択肢は結果の箇所の後述)、質問4：相互の呼称変化の理由「お互いの呼称が変わる理由は何だと思えますか。」(自由記述)、質問5：心理的離乳への考え「子どもと親の関係は子どもの成長に伴って、どのように変化していくと思えますか。あなたの考えを書いてください。」(自由記述)。

目的2に関する質問項目：

質問6：あなたと親との心理的な距離の程度についてお尋ねします。次の質問①～⑥のそれぞれに対して、5～1の5段階のいずれかをもっとも近い所にマークして回答してください。

質問①対父親との時間、質問②対父親との空間的

距離, 質問③対父親との心理的距離, 質問④対母親との時間, 質問⑤対母親との空間的距離, 質問⑥対母親との心理的距離.

「5」近い(あるいは接近, 一致), 「4」やや近い(あるいはやや接近, やや一致), 「3」どちらともいえない, 「2」やや遠い(あるいはやや不一致), 「1」遠い(あるいは不一致).

2 結果

2-1 目的1: 現在の相互の呼称(質問1)

表2に示すように, 子どもから親へは「お父さん・お母さん」が一番多く(73.5%), 「パパ・ママ」は7.4%であった. 他方, 親から子どもへは「呼び捨て」が一番多く(57.2%), ついで「~ちゃん・さん」(25.7%)であった.

表2 現在の相互の呼称(10肢選択)

百分率	対父母	対自分
42.9%	お父さん・お母さん	- 呼び捨て
22.3%	お父さん・お母さん	- ~ちゃん, ~さん
8.3%	お父さん・お母さん	- あだ名, 愛称
10.3%	おとん・おかん(おとう・おかあ)	- 呼び捨て
1.7%	おとん・おかん(おとう・おかあ)	- ~ちゃん, ~さん
4.0%	おとん・おかん(おとう・おかあ)	- あだ名, 愛称
4.0%	パパ・ママ	- 呼び捨て
1.7%	パパ・ママ	- ~ちゃん, ~さん
1.7%	パパ・ママ	- あだ名, 愛称
4.3%	その他	

2-2 目的1: 相互の呼称変化の時期(質問2, 3)

自分から父母への呼称が変化した時期(質問2)に関して最も多い時期は中学生期であった(43.9%), ついで「変わらない」(37.2%)であった. 他方, 父母から自分への呼称が変化した時期(質問3)は, 同様に中学生期が一番多かった(43.9%). 次は「変わらない」(38.5%)であった. この結果は, 相互の呼称の変化は中学生期と, 現在も変わらないとする2つが多いこと, つまり2極化傾向があることを示している.

質問2と質問3に関するクロス集計表が表3である. CramerのVは0.415($p < 0.01$), カイ自乗検定は155.573 ($p < 0.01$, $df = 9$)であり, 両者には連関が見られた.

表3 父母との間で相互の呼称が変化した時期(表示は人数)

	↓父母への呼称の変化 /		→自分への呼称の変化の時期		
	中学生	高校生	現在	変わらず	合計
中学生	94(3)	15	3	20	132
高校生	14	19	1	11	45
現在	6	2	3	1	12
変わらず	18	8	2	84	112
合計	132	44	9	116	301名

注: 小学生3名(相互同時に変化)は中学生に含めてある.

2-3 目的1: 相互の呼称変化に関する理由(質問4, 自由記述)

お互いの呼称が代わる理由について自由記述を求め, その自由記述の文章から頻出するキーワードを選び出し, それを手掛かりにして内容を論理分析した.

この分類は主観的であり内容的な重複もみられるが, あえてそのまま分類してある. 分類の結果は表4に示すように, 「反抗期」「お互いの照れ」「対等の大人」「他者の目, 暗黙の圧力, 世間体」「気分, 対人的スキル」「間合い, 距離感」の6つであった.

表4 相互の呼称変化の理由(要約の見出しと回答例)

1 反抗期だから

(1) 思春期に入ると反抗的な態度になってしまうから.
(2) 自分が反抗期の時など, 特に父に対しては呼び方が変わったりする. 相手もそうだと思うけど, 気持ちの変化によって変わるのだと思う.

2 お互いの照れから

(1) 自分が思春期になり, お父さん, お母さんと呼ぶのが照れくさくなり, おとん, おかんと呼び方が変わった. 親は反対に関わりを持つとしますので, あだ名を付けて呼び始めた.

(2) 中学になってから「パパ, ママ」と呼ぶのは恥ずかしいから.

3 対等の大人だから

(1) 私が小さい時は親に「~ちゃん」と呼ばれていました. 今は, 呼び捨てになり, そのきっかけは私が親に自分の意見を言うようになったことだと思います. 小さい頃とは違い, 対等な立場で話せるようになると, 呼び方が変わるのだと思います.

(2) 親が自分を小さい子どもとしてみるのではなく大人としてみるようになったから.

4 他者の目, 暗黙の圧力, 世間体から

(1) 成長していく過程で, まわりから幼いと指摘され, 恥ずかしく思ったりするから.

(2) 一番の理由は周りの環境だと思う. 私は保育園の時, 「パパ」「ママ」だったが, 小学生の時にみんなが「お父さん」「お母さん」と言っていて, 恥ずかしくなって直した覚えがあるからだ. もしみんなが「パパ」「ママ」だったら, 中学か高校もしくは今になってもずっと呼び名は変わらないままだったからかもしれない.

5 気分, 対人的スキル

(1) 短い方が呼びやすいため.

(2) 怒っている時は呼び捨てになってしまう. 何か自分から頼む時はかわいらしく「~ちゃん」とか呼び捨てにならない.

6 間合い, 距離感

(1) 子供の反抗期によって親と間を取りたくなった時.

(2) お互いの距離感が変わるから, 子どもの方が親離れしていく影響が大きいと思う.

2-4 目的1：心理的離乳に対する考え（質問5, 自由記述）

得られた回答20ほどについて記述の中に頻出するキーワードを抜き出した。次に回答者ごとに、その語が書かれているかどうかを調べて頻度を数え上げた。作業に伴い新規に頻出するキーワードは加えた。以下の表5にはその百分率を示す。例えば「好意」が25.2%とは回答者の25.2%が「好き」「好意」「好ましい」などの語を使っていたことをあらわす。すなわち表5の語は簡略化されていて、類似語を代表して掲載してある。例えば、「親密」には「親しい」を含めており、「疎遠」には「遠くなる」などを含めている。これらの語は西平（1990）、落合（1995）、池田ら（2003）などの心理的離乳の説明に含まれる語とかなり共通している。彼らの論考が女子青年の素朴な心理的記述をていねいにカバーしていることがわかる。なお、附表に実際の回答例をいくつか転記する。

表5 心理的離乳に関する記述にあらわれた語（数値は%）

好意	嫌悪	親密	疎遠	尊敬	軽蔑	既知	未知	関心	無関心	依存	独立	信頼	不信
25.2	40.9	54.5	29.9	70.1	16.9	4.7	9.6	27.2	24.3	48.5	51.5	60.1	12.0

2-5 目的2：心理的離乳の相互関係（質問6）

親子の距離感が近いか遠いかを説明するために3種類の側面から評定を求めた（質問6）。それぞれの平均値（標準偏差）を表6、ピアソンの相関係数を表7に示す。それぞれについて父母間で平均値の比較を行うと、いずれも1%の有意水準で有意差が見出された。

（時間的距離： $t=10.362$, 空間的距離： $t=11.367$, 心理的距離： $t=9.685$, $df=300$, 両側検定）。すなわち母親に対する距離の方が父親に対する距離よりも近かった。

次に、時間的、空間的、心理的の3項目の総計を算出し、同様にして対応のある2群間の平均値の比較を行った。その結果、母親に対する方が父親に対する方よりも平均値が有意に高く、距離感の近いことが明らかになった（ $t=13.191$, $df=300$, $p<0.01$, 両側検定）。なお、対父親3項目に関する α 係数は0.743, 対母親3項目に関する α 係数は0.730であった。

表6 両親への3つの距離に関する項目得点の平均値（標準偏差）

	時間的距離	空間的距離	心理的距離	総計
対父親	2.977(1.103)	3.150(1.129)	3.123(1.093)	9.249(2.703)
対母親	3.767(1.036)	3.993(0.876)	3.851(1.000)	11.611(2.342)

表7 両親への3つの距離に関する相関係数

①対父時間	②対父距離	③対父心理	④対母時間	⑤対母距離	⑥対母心理	
	0.570**	0.434**	0.235**	0.110	0.148*	①
		0.469**	0.135*	0.193**	0.159**	②
			0.128*	0.116*	0.227**	③
				0.550**	0.372**	④
					0.501**	⑤

** $p<0.01$, * $p<0.05$ 両側検定

6項目に関しての相互関係を詳しく見るために因子分析を行った。Kaiser-Meyer-Olkin (KMO) の標本妥当性は0.663, Bartlettの球面性検定は444.004 ($df=15$) で1%水準で有意となったのを確認の上、最尤法による因子抽出をし、スクリープロット1以上の2

因子についてKaiserの正規化を伴うプロマックス回転を試みると表8のようになった。第1因子は対母親への距離の因子、第2因子は対父親への距離の因子と解釈し

た。第2因子までの分散は50.291%, 因子間相関は0.287であった。

表8 両親に対する3つの距離に関する因子分析

変数	第1因子	第2因子
対父時間	-0.018	0.754
対父距離	0.038	0.747
対父心理	0.018	0.598
対母時間	0.608	0.055
対母距離	0.908	-0.075
対母心理	0.554	0.067

以上、時間的距離（時間間隔）、空間的距離、心理的距離の3つは相互に有意な正の相関があり、3項目の総計に関する信頼性（ α 係数）もかなり満足に近い数値が得られた。平均値はいずれも対父親よりも対母親の方が有意に高く、女子青年は時間的にも、空間的にも、心理的にも母親への密接さが大きいことが明らかになった。

まとめにかえて

研究1で見えてきたように、心理的距離という概念は多くの研究で使われ、また別々の測定法によって研究が進められている。本研究もまたその流れの中にあることは否めないが、心理的離乳と心理的距離は必ずしも同じではなく、にもかかわらず心理的離乳を心理的距離の語を使って説明していくことは親子関係研究の1つの切り口になっていることは認めたい。

研究2では、時間的距離（時間間隔）、空間的距離、心理的距離の3つの間に相互に高い有意な正の相関関係が認められた。女子青年は父親よりも母親に近い距離感を持っていることも明らかになった。また、自由記述からは、呼称の変化の理由を心理的離乳の時期と関連させて回答するケースが多くみられており、両者の関係を強く示唆する回答結果が得られた。

大野木（2005）は、親疎・好嫌などの対人関係上の程度をあらわす概念として「間合い」概念を提案してきた。武道や野球・ボクシングのようなスポーツで使われている間合いを、相手との付かず離れずの対人関係の説明に用いているのが大野木（2005）の間合い概念である。この間合い概念は理論的・経験的な論考にとどまっていた、未だに実証的データが欠落していたのであるが、本稿の研究2で3つの距離が相互に関連するという知見は、両者が時間的、空間的に接近し密接であるほど心理的距離も近く、時間的・空間的に離れているほど心理的距離が遠いという間合いの経験則を実証することになっていると考えられよう。

<付記> 本稿の研究2の一部は、日本心理学会第73回大会（2009年8月、立命館大学）において発表された。

引用文献

- 天貝由美子（1996）. 中・高校生における心理的距離と信頼感との関係 *カウンセリング研究* 29, 130-134.
- 遠藤利彦（1999）. 心理的離乳 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁栞算男・立花政夫・箱田裕司（編）（1999）. *心理学辞典* 有斐閣 p.461.
- 藤井恭子（2001）. 青年期の友人関係における山あらし・ジレンマの分析 *教育心理学研究* 49, 146-155.

- 藤永保・仲真紀子（監）岡ノ谷一夫・黒沢香・泰羅雅登・田中みどり・中釜洋子・服部環・日比野治雄・宮下一博（編）（2004）. *心理学辞典* 丸善
- 古川雅文・藤原武弘・井上弥・石井慎治・福田廣（1983）. 環境移行に伴う対人関係の認知についての微視発達の研究 *心理学研究* 53, 330-336.
- Hall, E.T. (1966). *The hidden dimension*. New York: Doubleday. ホール(著)日高敏隆・佐藤信行（訳）（1970）. *かくれた次元* みすず書房
- Hollingsworth, L.S. (1928). *The psychology of the adolescent*. New York: D. Appleton Century Company.
- 池田幸恭・大竹裕子・落合良行（2006）. 「子の親に対するかかわり方」からみた心理的離乳への過程仮説 *筑波大学心理学研究* 31, 45-57.
- 金子俊子（1990）. 心理的距離 久世敏雄・斎藤耕二・福富護・二宮克美・高木秀明・大野久・白井利明（編）*青年心理学事典* 福村出版 p.272
- 金子俊子（1991）. 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 *青年心理学研究* 3, 10-19.
- 三島浩路（2003）. 学級内における児童の呼ばれ方と児童相互の関係に関する研究 *教育心理学研究* 51, 121-129.
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁栞算男・立花政夫・箱田裕司（編）（1999）. *心理学辞典* 有斐閣
- 中條修・滝浪常雄（1989）. 呼称に見られる対人関係の認識 *静岡大学教育学部研究報告書* 40, 1-16.
- 西平直喜（1990）. *成人になること—生育史心理学から—* 東京大学出版会
- 落合良行（1995）. 心理的離乳への5段階過程仮説 *筑波大学心理学研究* 17, 51-59.
- 落合良行・佐藤有耕（1996）. 親子関係の変化から見た心理的離乳への過程の分析 *教育心理学研究* 44, 11-22.
- 大野木裕明（2000）. 学校教師のニックネーム *福井大学教育地域科学部紀要（第IV部）* 56, 25-42.
- 大野木裕明（2001）. ニックネームを主題とするマンガ作品の心理学的考察 *福井大学教育地域科学部紀要（第IV部）* 57, 25-44.
- 大野木裕明（2005）. *間合い上手* NHK出版
- 佐々木淳・菅原健介・丹野義彦（2005）. 羞恥感と心理的距離との逆U字的関係の成因に関する研究—対人不安の自己呈示モデルからのアプローチ— *心理学研究* 76, 445-452.
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護（1994）. 青年期の交友関係における同調と心理的距離 *教育心理学研究* 42, 21-28.
- 梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田新（監）（1981）. *新版心理学事典* 平凡社
- Wapner, S. 1978 Some critical person-environment

transitions. *Hirosima Forum for Psychology*, 5, 3
-20.

山口正二・小島弘史・原野広太郎 (1991). 性格類型に規定される心理的距離に関する研究 *カウンセリング研究* 24, 11-17.

山根一郎 (1987). 心理的距離と面識度水準の効果にもとづく対人経験の分析 *心理学研究* 57, 329-334.

矢野喜夫 (1973). 家族のコミュニケーション生活 *京都大学人文科学研究所調査報告 (第29号)* 「都市における家族の生活」 161-196.

り、独立すると遠くなっていく。特に私は女なので、異性の親に対してはあまり好意や親密さを持たずに早い時期から気持ちの上で離れていった。それは呼び方にも象徴されている。幼い頃は自分からみると親が一番尊敬でき信頼を寄せていたため、何をするにしても依存していた。大人になるにつれて、親以外の人に関心が向くことで、一緒にいたり話したりする時間が少なくなってくる。でもまだ大学生という社会的に未熟な人間なので、就職や結婚という未知のことになると、親を頼ってしまうのだろう。一度社会に出て、結婚をして子どもができると今度は自分が親として子どもとの新しい関係を取り始めるのだろうと思う。

附表 心理的離乳への考えに関する回答者の回答例

質問6：子どもと親の関係は子どもの成長に伴って、どのように変化していくと思いますか。あなたの考えを書いてください。」(自由記述)。

(1) ケース1：これは聞いた話であるが、私が生まれる時、父は会社の接待でゴルフに行っていなかった。そして、仕事から帰ってくるのも遅く、あまり父親と接する機会がなかったようだ。私が母親たちと母親の実家に遊びに行っていた時のこと、後から迎えにきた父親をみて、私は祖父の元へ逃げたみたいだった。これは2歳ぐらいの時の出来事だが、私は自分の父親をはっきりと認識できていなかったようで、父親をみて知らない人だと思い、不信感を抱いていたみたいだった。この時の記憶はまったくないが、私は父親というものに無関心だったのかもしれない。(中略)

このように私もそうであったが、思春期の時期は親に対して軽蔑、嫌悪、疎遠になったりと、マイナス面を持つ関係が構築されるだろう。これは子どもが成長していくにつれて、避けて通れないものであると思う。しかし思春期がすぎ、大学生、社会人になるにつれて、だんだんと親の立場や気持ちがわかるようになってくる。もちろん、すべての家族に於いてそう言えるわけではないが、親との関係の中に信頼感みたいなものが生まれてくるのではないかと思う。よって、全体的に関係は良い方向に変化していくとわたしは自分の経験から考えた。

(2) ケース2：小さい時はとにかくお母さん大好き。私は保育園でアルバイトをしていたのだが、母親の姿が見えなくなると泣き出す子はたくさんいる。しかし成長するにつれだんだん一人の時間を欲するようになり、母親が少し助言するだけで口うるさく感じてしまい、あまり話したくなくなる。そして親子の関係は遠くなる。しかし就職や進学するにあたって、なかなか自分の決断力だけでは決めかねることがあり、そこで親に相談してみたいくなる。そこで信頼関係が生まれる。結婚はやはり親の承だくを受けてしたいもの。そして親から離れて独立し、新しい家庭をつくるということでもある。親からは離れるが心の中ではつながっている。

(3) ケース3：子どもと親との関係は子どもが大人になってどんどん親以外の人々と関わるようにな